

機関番号：12603

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007 年度 ～ 2010 年度

課題番号：19720119

研究課題名 (和文) 日本語母語話者と日本語学習者の意見文におけるモダリティ使用

研究課題名 (英文) Modal Expressions in Opinion Essays by Native Speakers of Japanese and Learners of Japanese

研究代表者 伊集院 郁子 (IJUIN IKUKO)

東京外国語大学 留学生日本語教育センター 講師

研究者番号：20436661

## 研究成果の概要 (和文)：

本研究では、日本語母語話者 (134 名) と学習者 (台湾 57 名及び韓国 55 名) が執筆した日本語意見文に出現する「主張」に着目し、モダリティ表現 (書き手の心的態度) の特徴を中心に構造的な観点から分析を行った。大学レベルでのアカデミック・ライティングにつながる意見文の指導に関し、いくつかの提言を行うと同時に、教育・研究目的で利用できる作文データベースを整備し、公開した。

## 研究成果の概要 (英文)：

For this research, 134 Japanese opinion essays were collected from native speaker university students, along with 112 from learners of Japanese (57 Taiwanese and 55 Korean). A database was subsequently constructed.

Modal expressions associated with the writers' "assertions" were analyzed based on structural characteristics. Suggestions with regard to Japanese academic writing at the university level were provided and, simultaneously, "A Database of Japanese Opinion Essays by Japanese /Korean /Taiwanese University Students" was published online.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,200,000	630,000	3,830,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：作文データベース、日本語母語話者、日本語学習者、意見文、主張、モダリティ、アカデミック・ライティング

## 1. 研究開始当初の背景

日本語教育の現場では、日本語学習者の書く日本語作文に、日本語母語話者には見られない特徴があることが指摘されてきたが、相当数のデータに基づく客観的な分析は行わ

れてきていない。日本語学習者の作文を評価的観点から分析した田中他 (1998) によると、「内容」「主旨の明確さ」「構成」が、いい作文の決定要因になっている可能性があるという。意見文では「主張を述べる」ことが必須の要素であり、作文中のどこでどのように

主張を述べるかが、上記の作文評価の要因に大きく影響する。そこで、本研究では、「主張を述べる」言語行動に着目し、日本語母語話者と学習者が同条件で執筆した日本語意見文の特徴を明らかにすることを旨とする。

このような研究に利用しうる言語コーパスは、近年になって徐々に作成されつつあるが、英語と比べ、日本語コーパスは歴史も浅く、数も少ないのが現状である。日本語母語話者コーパスでさえ整備の途上にある中、学習者コーパスはなおさらである。そのため本研究では、学習者の母語干渉や習得の問題を論じることが可能となるよう、条件を統制したうえで作文データを収集することとした。収集したデータは執筆者に関する情報を付与し、教育・研究目的で広く利用可能となるよう、pdf データ、テキストデータ、一文一行に整形したエクセルデータの形式で公開することとした。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本語母語話者と日本語学習者の意見文の特徴を主にモダリティ（書き手の心的態度）の観点から分析し、アカデミック・ライティングにつながる作文指導に関する提言をすること、研究者が分析に有用できる作文のデータベースを整備することを目的としている。

この目的を遂行するための課題として、以下の3つを立てた。

- (1) 日本語母語話者の意見文を収集し、典型的に出現するモダリティを量的・質的に分析すると同時に、意見文に共通してみられる構造的特徴を見出す。
- (2) 日本語学習者（台湾及び韓国）の意見文を収集し、(1)と同じ観点で分析を行う。
- (3) (1) (2)の分析結果から日本語作文教育への提言を行うと同時に、収集データの整備を行い、一般に公開する。

## 3. 研究の方法

### 3-1 手順

研究は以下の手順で行った。

- (1) 既存のデータベース（国立国語研究 2001, 2004）を利用し、新規に収集するデータについてパイロットスタディを行う。
- (2) 東京、台湾、韓国でデータ収集を行う。東京は2007年6月から11月にかけて、台湾は2007年12月、韓国は2009年9月にデータ収集を行った。
- (3) データベース化の手順や文字化の規則を記したマニュアルを作成する。
- (4) マニュアルにしたがい、収集したデータをデータベース化する。
- (5) 以下の観点から収集データの研究を行い、日本語作文教育に提言を行う。
  - ① 主張の述べ方（モダリティの特徴）

- ② 主張の現れる位置と文章構造の関係
  - ③ タイトルに見られる主張の特徴
- (6) データベースの整備を行い、一般に公開する。

### 3-2 データ収集

東京都内の大学に通う日本人大学生（JP）、台湾の大学に通う日本語学習者（TM）、韓国の大学に通う日本語学習者（KR）に意見文の執筆を依頼した。3者ともに大学生に限定し、同等の学習背景と能力をもった執筆者を想定した。JPは3つの大学、TMは1大学、KRは2大学から調査対象者を募り、相当数のデータを確保するために全ての応募者を調査対象とした。執筆者は、同一の課題文を読み、辞書などは使用せずに約60分で原稿用紙1枚に800字程度で執筆した。

台湾および韓国の執筆者に関しては、日本語能力試験2級（学習時間600時間相当）以上の日本語学習者を対象とした。実際の日本語能力を測る参考データとしてSPOT（日本語能力簡易試験）も実施した。また、母語の影響が論じられるよう、日本語で執筆した後で、同じ内容の意見文を母語でも執筆した。執筆者に関する詳細は表1の通りである。

表1 執筆者情報

執筆者	人数	性別	平均年齢
JP	134名	男性90名, 女性44名	19.4歳
TM	57名	男性14名, 女性43名	21.1歳
KR	55名	男性9名, 女性46名	22.2歳

### 3-3 データベース化

データ収集後、談話レベルでの分析にも適するデータベースの仕様を考え、Microsoft Excel のオートフィルタ機能で分析できる「全作文1文1行ファイル」を作成した。また、以下に示す執筆者に関する情報を入力し、リンクをはって各執筆者の意見文のpdfファイル、テキストファイルを表示できる「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」を作成し、公開した。本データベースの概要は、表2の通りである。

#### JPに関する情報

専門：文系・理系の別（及び専攻）／学年／性別／年齢／出身地／被験者の海外滞在歴（3年以上）／データ収集時期

#### TM及びKRに関する情報

性別／出身地／SPOT：日本語能力測定簡易テストの結果（点数）65点満点／日本語能力試験の合格級／生年月／年齢／その他の言語（TMは第一言語と第二言語、KRは母語・日本語以外で、日常会話レベルの使用ができ

る言語) / 日本語学習歴 / 日本滞在歴 / 日本以外の海外滞在歴 (3年以上) / データ収集時期

表2 データベースの概要

	作文数		タイトル数		本文数		段落数	
	日	母	日	母	日	母	日	母
JP	134	/	133	/	2176	/	553	/
KR	55	55	55	53	918	-	244	256
TM	57	50	57	49	1050	-	252	223

※表2の「日」は日本語意見文を、「母」は母語による意見文を表す。また、母語による意見文の本文数は、中国語及び韓国語の文をどう定義するかによって異なるため、記載していない。段落数は、執筆者自身が原稿用紙上に設けた空欄マスや改行によって認定した。

### 3-4 分析の方法

データベースの完成後、分析者2名で全文について「主張」「根拠」「譲歩」など文機能のコーディングを施し、一致しないところについては協議のうえ機能を決定した。

本研究は、モダリティ表現(書き手の心的態度)の相違を「主張」に着目して分析するものであるため、「主張」をいかに認定するかが重要となる。本研究では、主張とは、テーマに関する書き手の意見が明確に表されているもの、と定義し、以下の手順で主張の認定を行った。

(1) 定義に従い、分析者2名が個別にコーディングしていき、両者のコーディングが一致したものを主張と認定する。

(2) 2名のコーディングが一致しなかった場合は、李(2008, p103)を参考に作成した以下の基準(3)に従って判定しなおし、① a、bの両者、または② a、b、cのうち2項目以上当てはまる場合は、主張と認定する。

- ① タイトルに主張が明示されている場合
  - a タイトルがそのまま反復されるもの、または、タイトルの叙述表現が形を変えて主張を表すもの
  - b 意味の完結度の高いもので、文脈への依存度が低く、他の文からの独立性が高いもの
- ② タイトルに主張が明示されていない場合(タイトルが話題提示の場合、タイトルが話題提示にも主張表明にも機能する場合、タイトルから複数の主張の解釈が可能な場合)
  - a タイトルまたは課題文に提示された話題について述べられているもの  
あるいは、2名の判断が「主張」と一致した文と同じ主張が反復されるもの

b 叙述表現が主張を表すもの(特に、第三者に対する要望や当為の文の機能をもつものが主張になりやすい。)

c 意味の完結度が高く、文脈への依存度が低く、他の文からの独立性が高いもの

以上のような定義を設けたうえで、①主張の述べ方(モダリティの出現のし方)、②主張の現れる位置と文章構造の関係、③タイトルに見られる主張の特徴を分析した。

## 4. 研究成果

### 4-1 主張の述べ方

定義にしたがって主張と認定された文を取り出し、言語的分析を加えたところ、JP、TM、KRいずれも、主張を表す文の文末には「考える系(「考える」「考えない」「考えられる」「考えている」等)・「思う系(「思う」「思わない」「思える」「思っている」等)の思考動詞、「だろう」「のだ」等のモダリティ表現、「賛成だ/賛成する/賛同する/支持する」「反対だ/反対する」「~の立場である/立場をとる」の立場表明の表現が多く見られ、JPでは全主張文の81.5%、TMは77.2%、KRは89.1%にこれらの言語形式が用いられていた。また、JPの主張文の文末は学習者に比してモダリティ表現の使用が多く、個別の言語形式では「だろう」と「考える」系の使用が目立つ。一方、学習者は「思う」系の使用が顕著であり、その他の言語形式の使用はあまり見られなかった。同じ表現の繰り返しは単調で貧困な印象を与えやすいため、学習者にも、「思う」系だけでなく客観性が高まる「考える」系や「だろう」などの表現の使用を指導するとよいだろう。

さらに、JPの言語形式と文章構造との関係について分析した結果、冒頭の第一文にある主張64例のうち56例(87.5%)、末尾の最終文にある110例のうち99例(90.0%)にこれらの言語形式が使われており、冒頭文では、思考動詞47例(「思う」系26例、「考える」系21例)、立場表明の表現が8例で、モダリティの使用は「だろう」1例のみであった。これに対し、最終文では、思考動詞57例(「思う」系32例、「考える」系25例)、モダリティが39例(「だろう」24例、「のだ」「のではない(だろう)か」5例ずつ、「べきだ」3例、「てはならない」「なければならない」1例ずつ)、立場表明の表現は3例で、図1に示したように、「主張」の文末表現は用いられる位置が対照的であった。

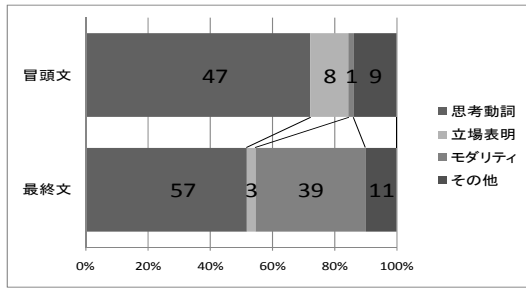


図1 JP冒頭文と最終文の主張の言語形式

最終文に5例見られた「のだ」「のではない(だろう)か」の文章全体における出現位置を見てみると、12例中10例、「のではない(だろう)か」は8例中7例が段落のおわりに置かれる「主張」に用いられていた。「のだ」「のではない(だろう)か」は、「主張」以外のものも含めると148例であったが、その出現位置をみても、72例(48.6%)が次の例のように段落のおわりに出現している。

●JP103-14 だからこそ、考えるという作業は非常に重要なのである。

「根拠」<段落末尾>

●JP057-15 そのための手段として、総合的に情報を扱っている新聞や雑誌といった紙媒体のメディアが果たす役割は今後も失われることはないのではないだろうか。

「主張」<段落末尾>

モダリティ表現の適切な使用は学習者にとって習得が難しい項目の1つと言われているが、このように文章構造の型と機能との関連を示すことは、有効な指導法であると思われる。

#### 4-2 主張の現れる位置と文章構造の関係

続いて、主張が明示される位置によって文章構造の型を定義し(表3)、作文を分類した結果(表4)、JPの文章構造は頭尾型が60.4%を占め、中尾型を合わせると76.1%となり、「(背景的情報)→主張→根拠→主張」という流れで意見文を構成するものが基本であった。

一方、学習者は頭尾型、中尾型、尾型の3つの型がそれぞれ20%以上出現しており、JPのように1つの型に集約されずに拡散している。独立性の検定(カイ二乗検定)の結果、JPと学習者(TM, KR)の頭尾型の使用数の偏りは有意であった( $\chi^2(2)=23.761, p<.001$ , JP対TM: $\chi^2(1)=13.349, p<.001$ , TM対KR: $\chi^2(1)=.250, p=.681, n.s.$ , KR対JP: $\chi^2(1)=17.171, p<.001$ )。

学習者が所属する海外の3つの大学ではいずれも「作文」という授業があるが、「作文の構成」に関してはあまり指導をしておらず、語彙・文法などの表現レベルの指導を重視しているとのことであった。そのため、文

章構造については母語での書き方が色濃く現れた可能性もあるが、一方で外国語での執筆という条件により意図する主張が十分に伝達できなかった可能性も考えられる。この点については、学習者の母語による意見文の分析や、習得レベル別の日本語意見文の分析によって、考察を進める必要がある。原因の解明は今後の課題となるが、本分析からは、意見文を指導する第一段階では、頭尾型の文章構造を基本として主張を組み立てることを推奨すべきと言えるだろう。典型的な文章構造であれば、多少言語表現に誤りがあっても論理展開が想像しやすく、主張が伝わりやすくなるためである。

表3 主張の位置による文章構造の型

型名	はじめ	なか	おわり
頭型	○*	—	—
中型	—	○	—
尾型	—	—	○
頭尾型	○	—	○
頭中型	○	○	—
中尾型	—	○	○
分散型	○	○	○
非明示型	—	—	—

\*表中の○は、主張が明示されていることを示す。

表4 文章構造の型による作文数

型名	JP (%)	TM (%)	KR (%)
頭型	2 (1.5)	0 (0.0)	3 (5.5)
中型	2 (1.5)	6 (10.5)	4 (7.3)
尾型	19 (14.2)	12 (21.1)	16 (29.1)
頭尾型	81 (60.4)	18 (31.6)	15 (27.3)
頭中型	2 (1.5)	2 (3.5)	0 (0.0)
中尾型	21 (15.7)	14 (24.6)	14 (25.5)
分散型	6 (4.5)	4 (7.0)	3 (5.5)
非明示型	1 (0.7)	1 (1.8)	0 (0.0)
合計	134	57	55

#### 4-3 タイトルに見られる主張の特徴

最後に、タイトルの機能について李(2008)をもとに分析者2名で次のI・II・IIIの3タイプに分類したところ、JPは学習者に比べ、名詞形で主張表明とも話題提示とも解釈可能なタイトル(IIタイプ)をつけることが多かった。

**Iタイプ**: 主張表明

課題文に対する書き手の意見・主張が明示されているもの

●JP104-00 インターネットが引き起こす諸問題

●KR005-00 それでも、新聞や雑誌は必要だ

Ⅱタイプ：話題提示にも主張表明にもなるもの

- JP001-00 紙メディアの今日的意義
- TM022-00 新聞や雑誌の必要性

Ⅲタイプ：非主張表明

課題文に対する書き手の意見・主張が明示されていないもの

- JP130-00 新聞・雑誌の将来について  
<話題提示>
- KR049-00 インターネット時代  
<主張不明>

下に示す JP の例 (JP037-00, JP043-00, JP045-00) では、一見話題提示に見える名詞形式 (～の {必要性/価値/有用性}) を用いているが、これらは、「～には {必要性/価値/有用性} がある」という主張を内包しているため、話題提示にも主張明示にもなりうる。一方、TM・KR のタイトルは、文の形式で端的に主張を明言する I タイプ (TM049-00) か、一般的な名詞で話題を提示したり (KR049-00) 抽象的な名詞で主張を暗示的・象徴的に提示したり (KR036-00) する III タイプが多く、主張の明示度は両極に分かれている。

- JP037-00 新聞や雑誌の必要性
- JP043-00 新聞・雑誌の価値
- JP045-00 紙媒体の有用性
- TM049-00 新聞や雑誌は必要だ!
- KR049-00 インターネット時代
- KR036-00 もろはの剣

タイトルの機能を言語形式と併せて一覧にまとめた結果 (表 5)、JP のタイトルの言語形式は不完全文、特に「N: 名詞」が多く、JP と学習者 (TM, KR) の「N: 名詞」の使用数には有意差があった ( $\chi^2(2) = 13.011$ ,  $p < .01$ , JP 対 TM:  $\chi^2(1) = 8.924$ ,  $p < .01$ , TM 対 KR  $\chi^2(1) = .003$ ,  $p = .959$ , n. s., KR 対 JP:  $\chi^2(1) = 8.258$ ,  $p < .01$ )。JP による名詞形のタイトルは、接尾辞「性」や形式名詞「もの」「こと」の使用、「と」「へ」等の格助詞+「の」、「による」「における」等の複合助詞、連体修飾節などによって実現されていた。これらは、学習者にとっては、産出が困難な難度の高い文法項目である。

- JP029-00 新聞・雑誌の必要性
- JP045-00 紙媒体の有用性
- JP023-00 ネットが満たせないもの
- JP066-00 重いということ
- JP085-00 インターネットとの共存
- JP098-00 ネット万能主義への疑問
- JP124-00 インターネット利用による情報伝達の利点
- JP116-00 インターネット時代における新聞・雑誌 メディアの意義

● JP088-00 消費者が求める二つの情報媒体

表 5 タイトルの機能と言語形式

JP		I (%)	II (%)	III (%)	計 (%)
不完全文	N: 名詞	31 (23.3)	33 (24.8)	23 (17.3)	87 (65.4)
	P: 助詞相当句	2 (1.5)	9 (6.8)	3 (2.3)	14 (10.5)
	O: 文未満	3 (2.3)	0 (0.0)	4 (3.0)	7 (5.3)
完全文	S: 文	10 (7.5)	1 (0.8)	3 (2.3)	14 (10.5)
	Q: 疑問文	1 (0.8)	0 (0.0)	10 (7.5)	11 (8.3)
計 (%)		47 (35.3)	43 (32.3)	43 (32.3)	133 (100.0)

TM		I (%)	II (%)	III (%)	計 (%)
不完全文	N: 名詞	5 (8.8)	4 (7.0)	15 (26.3)	24 (42.1)
	P: 助詞相当句	0 (0.0)	2 (3.5)	0 (0.0)	2 (3.5)
	O: 文未満	2 (3.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.5)
完全文	S: 文	16 (28.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	16 (28.1)
	Q: 疑問文	0 (0.0)	0 (0.0)	13 (22.8)	13 (22.8)
計 (%)		23 (40.4)	6 (10.5)	28 (49.1)	57 (100.0)

KR		I (%)	II (%)	III (%)	計 (%)
不完全文	N: 名詞	8 (14.8)	4 (7.4)	11 (20.4)	23 (42.6)
	P: 助詞相当句	0 (0.0)	1 (1.9)	0 (0.0)	1 (1.9)
	O: 文未満	4 (7.4)	0 (0.0)	3 (5.6)	7 (13.0)
完全文	S: 文	16 (29.6)	0 (0.0)	3 (5.6)	19 (35.2)
	Q: 疑問文	2 (3.7)	0 (0.0)	2 (3.7)	4 (7.4)
計 (%)		30 (55.6)	5 (9.3)	19 (35.2)	54 (100.0)

さらに、タイトルの機能と文章構造の型の関係を見ると、タイトルから主張が読み取れないタイプで、本文でも「はじめ」の部分に主張の明示がない文章構造 (中型・尾型・中尾型・非明示型) の意見文は、JP22 例 (16.5%)、TM22 例 (38.6%)、KR14 例 (25.9%) で、TM が JP より有意に多かった ( $\chi^2(2) = 10.889$ ,  $p < .01$ , JP 対 TM:  $\chi^2(1) = 10.907$ ,  $p < .01$ , TM 対 KR:  $\chi^2(1) = 2.032$ ,  $p = .154$ , n. s., KR 対 JP:  $\chi^2(1) = 2.176$ ,  $p = .140$ , n. s.)。逆に、主張が読み取れるタイプのタイトルで、本文でも「はじめ」と「おわり」で主張を述べる頭尾型の意見文は、JP 63 例 (47.4%)、TM 13 例 (22.8%)、KR 12 例 (22.2%) で、JP と学習者の使用に有意差が見られた ( $\chi^2(2) = 16.202$ ,  $p < .001$ , JP 対 TM:  $\chi^2(1) = 10.029$ ,  $p < .01$ , TM 対 KR:  $\chi^2(1) = .005$ ,  $p = .941$ , n. s., KR 対 JP:  $\chi^2(1) = 10.110$ ,  $p < .01$ )。タイトルから読み始め、第一段落を終了してもなお書き手の主張が伝わらない意見文は、読み手にかかる負担が多いため、日本語教育の立場からは、意見文におけるタイトルの機能と主張の位置に留意した指導が必要であると考える。

#### 4-4 本研究のまとめと今後の展望

以上、「主張」という言語行動に着目し、日本語母語話者と学習者（大学生）による意見文を、タイトル文まで含めて構造的・包括的に分析した結果、次のような点が意見文の指導項目として有効であると考えた。

・単一の表現を繰り返し用いるのではなく、主張表明に有効な多様な表現の運用を目指す。例えば、「思う」系だけでなく、「考える」系・「だろう」を使えるようにする。

・「のだ」や「のではない（だろう）か」などの導入に際しては、単文レベルで扱うのではなく、文章構造上の位置と機能にも留意して練習を行う。

・意見文は「はじめ」と「おわり」の段落に「主張」をおく「頭尾型」の文章構造を基本とする。

・タイトルについては、情報伝達性と経済性に貢献する手段として、主張を伝えるのに有効な抽象名詞（「必要性／重要性／信頼性／意義」など）や、文の名詞化の手段（接尾辞「性」や形式名詞「もの」「こと」など）の練習も取り入れる。

今後は、評価の観点や学習者の母語による作文教育も視野に入れ、意見文の文章構造、タイトルのつけ方、議論の流れ、言語表現の使用を実証的に捉えていくことにより、日本語母語話者および学習者の言語行動の特徴とその要因についてさらに分析を進めていきたい。

#### 【引用文献】

- 李貞暎(2008)『韓日新聞社説における「主張のストラテジー」の対照研究』ひつじ書房  
国立国語研究所(2001/2004)『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース CD-ROM版/オンライン版』  
<http://jpforldlife.jp/taiyakudb.html>  
田中真理・初鹿野阿れ・坪根由香里(1998)「第二言語としての日本語における作文評価ー『いい』作文の決定要因ー」『日本語教育』84号 pp. 14-26

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

(1) 伊集院郁子(2011)「文章表現指導の観点から『中級日本語』の文型を考える」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』37号 pp. 47-61 (査読無)

<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/63377>

(2) 伊集院郁子・高橋圭子(2010)「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティー日本・中国・韓国語母語話者の比較ー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36号 pp. 13-27 (査読無)

<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/57675>

(3) 伊集院郁子・横田淳子(2010)「『JLC 日本語スタンダード』に基づいた中級段階における文章表現指導の試みー『意見文』の指導を中心にー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36号 pp. 85-100 (査読無)

<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/57680>

(4) 伊集院郁子(2010)「意見文における譲歩構造の機能と位置ー『確かに』を手がかりにー」『AJジャーナル』2号 pp. 101-110 アカデミックジャパニーズグループ (査読無)

<http://www.academicjapanese.org/journal02.html>

(5) 横田淳子・伊集院郁子(2009)「『JLC 日本語スタンダード』に基づいた初級段階における文章表現指導の試み」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』35号 pp. 87-102 (査読無)

<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/51131>

〔学会発表〕(計4件)

(1) 伊集院郁子(2010)「『JLC 日本語スタンダード』の教育への応用を目指した文章表現教材の作成」教育GP「世界的基準となる日本語スタンダードの構築」日本語教育国際シンポジウム「JLC 日本語スタンダードの今後の展望」2010年11月27日(於:東京外国語大学・東京)

(2) 伊集院郁子・高橋圭子(2010)「日本人大学生による意見文の構造的特徴」日本語教育学会春季大会 2010年5月23日(於:早稲田大学・東京)

(3) 伊集院郁子・高橋圭子(2009)「日本語作文における意見の述べ方ー中国・韓国・日本語母語話者の文末のモダリティの比較ー」社会言語科学研究大会 2009年3月29日(於:東京外国語大学・東京)

(4) 高橋圭子・伊集院郁子(2007)「中国・韓国・日本語母語話者による日本語作文の分析ー疑問文および文末のモダリティを手がかりにー」元智大学ワークショップ「談話コーパスの構築とその利用」2007年9月2日(於:元智大学・台湾) <招待講演>

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/>

#### 6. 研究組織

研究代表者

伊集院郁子 (IJUIN IKUKO)

東京外国語大学・留学生日本語教育センター・講師

研究者番号: 20436661

研究協力者

高橋圭子 (TAKAHASHI KEIKO)

東洋大学・非常勤講師